



難
上
巻





いせれしりきれ細とて
 喜毎乃りきとほふとのを
 朱れき舞とのきりえね
 世曾の子おの屋つて舞
 あやほりたふおと南翠
 さとーりてさす

初春十二日於善藏持
 初文集 俳諧集

黄多れ糸に横日や小枝成し 六車
 掉さすささり七種の屋と 桂堂
 めつささう楠の押粘りくらん 松園
 昔よのさき使ささきふ 紫舟
 後受れ月少り出月と面映て 葉石
 むふ下りに木城ささき 四清

休室と云々ぬ露の馬うきに 聖殿
かとも市れは像きいれ何うさ 雨奉
いつの歯のぬき 應見の古西 省吾
そと山落り 言ふは 洪石
家らう来て 羽きく 鷹の執 南雅
谷とのうりによふ 木津の 瑞来
老の杖とらひい 登れ月の 和峰
花素うらみ 倒す 厚来紅 昌作
取くさすてに 空扇の 中を 皆 豊軒

はり 市と毛 枕 朔日のとまき 箕山
斜と云より 花れおくゆく 虚舟
おならふ くらりも 交ふ山 蘭 牧山
うやむ屋の 屏を 照く 離立て 堂
都の 不れ 下向うて 小ま 幸
鳴り 盆ふ 袴 膝 少のれ かのら 舟
まぐさ ごと け 不 瓜 乃 敵 園
投う ちく かさ 下 窓 れ 窓 窓 ころ 浮
ふり 少く じ 紙 の 山 物 松

けしきを温拂つる中なり
 髪のきつゝをけしきく 美 岩
 漸ほくすつともさす 山 の 声
 糸糸の 酒 粕 けり 解ふ 吾
 月のぬれ水は 結ぶかきとすや
 きぬきのさきさき 空 浪よすり 雅
 千代たけし 一句に 梅と 春とさめ 化
 西と 梅と 結ぶかきとすや 峰
 かまろく 糸糸の 口 供 田 踏 たり 山

うすくえれ 肩をきくく けり子 州
 星影を 蓬菜の上 ねぶく 牧
 門の けりく 詠く の 春 虚

各咏 無題 糸糸

うらいたや 大 山 中 の 一 下 ぎ 省 吾
 雲のむ 小 山 けり けり けり 美 岩
 花多に けり けり けり けり けり 豊 州
 ちりけり けり けり けり けり 柳 けり 梅 園

美多と少控くく川通り
甲津

蓬菜や六く二百八十條日
六条

檜板と小きせくく柳哉
箕山

菜のくかれ登り嶺と移り
瑞末

軟骨れ骨た布ふくく川
南翠

新玉ふく麦れ何るかきり
菊江

安世くく片きれ我くく
紫舟

○
世所せぬ長や江の房小田れ
虚舟

竹新や葉入くく暮れ夕柳
牧山

細く布て片ふ小くく柳小
倭旭

死のふより移る山あき春の水
歩山

変ふく米くくや流の水細く
冥慧

おろくく柳いきくく
枕林

○
嘯や下くく女のくく
松堂

○
一群ハ山くく山くかむ
和峰

不意快く来て二枚三枚
下野

つきののれ不ありふりまよふ雲の水
二三のころるふくむお山うね
あふやふしりたる舟あり
帰るけ山崎の舟ありさうか
昌化

○
まきん中

初さく牛の七枚の紙のふく
ハ格やふいそふれの知つき
此巻とに碓蓋をふむまふ
かつたのそふの柳よさうさうり
松海

あり巻小集
まきん中

吉柳やまゝ残るふらりた敷
水少りそくく破茶一棟
平置てけくたふにかほむん
かろこまゝこれ山崎のつよ
家うつるれ月か三五の古
下まかふや柳れ海島
ふくしれうつうとつた
杉永
雨木
卜物
松園
丹彦
月彦
ひき

中へくま重く吊るは進
隔る木若れ枝中にるは
百代り多しと云くは
松はく陰も月れがたり
多居来深し喜驚れ
流るり谷れやまのくらく
常物人のきくはくは
うきてそそ流と跡ふ深
掘りくつふ細の煙の
子 葉 物 國 永 木 松 平 島 幸

卯花れはほ小上望の種
春はくえりし抱る木の
東風、吹くくそ常を
ゆく藤先しりまは誰か
子代念れまは智叡れ
青果は下さ山景向の
之實の真魚板むく
人とし多しはまむ
世折の道有かねふ
子 葉 物 國 永 木 松 平 島 幸

菟の白くし取の白くしけり
るれすこ子梅の玉苗をわらん
産れれ水しき盤井をさむ
志めやまの流の月もほすく
妻子見えり望れ梅の
駒をと蓄れ糸をくにつまむ
任楽庵のりふふ谷百
掛られて多き一十の充の友
家くさくも多かさすふ
物

を後殿のむと多ふし之千柱
萩のふとくに味多れそ
意

冬歌

寒けり中

黄もやゆれきひくし七十里 無牛
井寺と云ふせし梅れふ 丹鹿
風れ名し雪を梅れ小わらふ 烏葺
旅人よすかきさや 菟 萱 けり
春風をせれ中山を梅り

後々、やまれりもふの道にあら
 心くりたも望もえんもたら豊か
 水喜やむとるふれりも
 さうりにしもあしつんす 松 雨木

〇

梅の香もくもくしきり麻の角 巨洲
 お乃つくも明りくもに梅ふし 三粟
 江邊のちてかや瞳月れり舟 若春

神子れもふもあけ梅の花 いふ
 山れもふもわかれてもふもあけ 苗
 夢よりそもたもれくも 玉之文 喜
 長きふもふもしきもせぬもふ 東
 くらもももも招んもりや 梅月 無
 ふもたも山もももももも 風や
 柳もももももももももも 子
 さひもももももももももも 自
 かわるもももももももももも 嶼

様もれぬしてふかれぬ
神垣のおくよりおきま
石夕

○

そ宗たぬまれ日けぬ
筆れまの 江中 たりる

廿二日 徳松
月夜 弟月並

春雨や始て高の
かこたりゆせふ 若柳の山 江平

標棠の春れ紫梅人
米いそぎきには
口笛と野れ
およんれ
まくれ
奴等
原ふ
早ま
南苔

在洞

分松

角洲

徳園

杉堂

道光

格堂

六

十

色多あつ〜 花の江戸酒
 追離の答書舟の入ら〜
 二度れ又い〜
 ち〜と赤百れ河の鶴の聲
 曳つるをれ泥子まふまに
 心蕪も揺ら下月星れ清けり
 輿のり〜れ〜か〜む 岸水
 出極く悼の糸うら木乃風
 折もそ〜に乾山ら 寢
 洲 松 園 堂 六 松 潤 平

が〜も〜に〜味〜
 幸海存子れ古さか〜
 ね〜下〜 競の州下〜
 異下〜さ〜と〜音〜
 川心ら先〜は〜吹〜
 紐とさ〜のぬ書寫れ奇如
 月を隔る〜の〜
 手たさ〜の〜
 洲 松 園 堂 六 松 潤 平

筑紫れ果し秀白をねん
 信濃しとくし松の節を
 長穂三稗はまれば
 じつ降の面神皇の
 子のれ望同帯
 平

各咏

日暮紅巾

万里のまはり大名を
 昔代や存れ山の
 揚れかむじ瓢の
 江の巻れ言く花
 同下をぬきの吹
 折合に物や江に
 莫多もを屋くそ
 花にりる候より
 うねりて言の
 分松
 立岡
 江平
 遠光
 居六
 大石
 角州
 杉巻

○ 喜此月かきいしとてふ人にもふ 廬山
吹らるる風は巧なや梅も 香松
喜風やふふあさけさききき 相見
号れきき定て下さきにきき 言え
寂知てちるぬるも橋の中、 赤雅

○ 志きりたて敷きり群々鳴田櫻 自為
ききりこれ休むりしきききき 静居

○ 志位の山なりにもきききき 慈園
きききききききききき 舟舟
川橋やむきききききき 舟舟
初さきききききききき 杖杖
山さきききききききき 十二
九折下てしきききき 相妻

廿五日 普鉢寺 納経
右古巻 月并細巻

○ 風やあきいつてきききき 土佐

うるふとの心 観新の世
 さはれ 窓のしくく人
 松 改
 條 筆 へ かな 流 ちさ
 叢 二
 かるつ 月れ ぶし せん
 其 白
 房を 帆し かな 皆 舟
 未 敵
 林 かな 外 西 寂 くる 面 たり ぬ
 昇 如
 松と たり に しの 心 六 波 羅
 交 徒
 い くの 王 登 ち 上 ち
 月 様
 使 ち せ せ ち び 直 今
 牧 小

雪れ 空 ち 知 ぬ 坂 の 雲 の 半
 ち ち 火 の ち 嵐 ち 四 ち
 風
 大 仙 の 練 ち ち ち 新 の 月 二
 森 れ 彦 ち かな 流 川 焉 改
 胡 麻 郊 の 中 ち 一 誰 かな 系 敵
 砂 ち ち ち 好 じ ち ち ち 字 白
 其 必 ち 府 子 に ち ち ち 洞 ち 一 徳
 隆 ち 九 ち 紙 糸 挽 ち ち ち 提 提

多味

大古部

けりし舟先よんふ柳ふ
 かゝり鳴釣の門先をりり
 松此上の笠をやふれれ月
 旅麻しりむし下し如桂水
 系此意らるのしりお柳
 栞しや隔ぬ山れ見か
 手れ多と小砂りそむ二月
 うきい下やりり水溜し下
 松阪 貴二 芦竹 栞二 京都 季末 懐之

春雨れり水々色しき
 秋少と下て音なり栞の二枚
 山つりかかれえんもさ
 一井多明てこもさ
 ちふれいつとむじん
 秋れ少りちりて身入さ
 号や色向と下り
 禁河の至夜し
 花をくぬ木に小栞れり

語行 昂如 脚六 栞子 桂州 萩古 如竹 土風 戸松

○ 悪者抄

中々に月をいせしと云れ山 雲縁
号れ々さけきくしと初言水 牛臥
茶喫て夏はとく市紙小橋分 多力
たうつととされハ早し揺舟 柳象

○ 隠国抄

夕言れ新 奮てとさくか 異芳
さじきくれ所たもとくぬ橋小 渡忌
るらさくくちんくくくく日言り 泉庭

舟うりに廻きいあくく 橋く柳 外招

○ 南教抄

新々れてさくくに出る不 秋分 東洋
くふれとく門掃茶れさく季が 九叙
日れくさくをにけくぬく人の夢 子枕
何ふすくも一秋新あつさくくく 天口

○ 竹名社中

花のふ酒くふは茶にせよ喜れ而 龜六
松よ来てくく号れ言言く柳 雲川

多柳を溜りたりやくやつり舟
去りぬ人と酒のまにたり梅林
のり

○
不のく事

まをれ呼してつりり喜れ水
垣根を心馬曳のちうめの
菴の取と流ふ人多る春の
穀垣し赤芽はる柳う角
人けく暖印たりるれれ多
考立てちつふかまのまはり
和京

石をと物歩けりるさるふ
凍とけく柳の糸もほもたり
一押にまゆりるれさるか
交印を少る本打鳥の根り
小て成吐出下山やまさる
橋くちを唯一かれさるり
筆れ身おひるをるに残るり
幾番

○
齋物は布

梅り多致善にらして算辭
梅山

物やふかきに似るふたかき
まくとまきまきまき柳の水

○

麦酒

晴る可きと情むる赤梧 杜洲
尾もらぬ再いほそ山の梅 父山
茅柳や露れ常とお下りく 未竹
か下りれ人の折下り物 其雙

○

浦淑

万葉も電下り山の京乃不衣 是に

是は二下り山もく 市 魚池
旅人の如きまにまきりまきり 管字

○

北林

まきりまきりまきり 松きり 岸耕
柳と鐵柳をまきりまきり 庸
まきりまきりまきり 料理のまきり 高元
まきりまきりまきり 糸のまきり 高元
まきりまきりまきり 山 松若
まきりまきりまきり 山 松若

○

歌

新太夫にむくろ下く人万橋か
海へこれ又下りてふれ木より子
さほく取や讀まじら舟の中
たし鳴て屋上れ鐘のこらや
たのしき人通るぬや梅れか
松れふれふ変て新にたれはり
杷のりもこのふれ口を是く南

招坂市

花をにきく下ふふれ白い水
控己

新太夫や前まじれ色市
号や人ハ多ふれきく包不也
川を来て取れ梅く香色くき
谷河をて流ふふれ山や下りてふ
のりれぬ山よりくふふ高か
新太夫や梅よて山法師
きく鳴てきふく下ふや池のふ
花に折きそに折しそのおれく水
らっけされ下りに残る花のふか

おがまのいかにて降ふさか
大虎

○
それらうき文書御くさふ
昔友

喜柳やおらう陸を渡の蝶
言

ふふ山阿をい海色れ雲
女

望の雲とふい飯小しきすり
糸案

まらうきとまらう服あそれ
一本
いふ

貴きれ来ぬ物つる
赤色し
先渡

惟物社中

世にぬるや花見うらを
権中
南星

浮へたき美多新りよ
い入む
亀陸

貴きやきのふとを
羽や
藤塔

咲ねも祿見たの
と
不き
菊莊

心太社中

押かきさや小結の
おふ
以
青笛

苑一本背戸小
所
ま
ま
丈丈

田津社中

○
山のうめをささ
さ
り
河
中
を
貴外

なれふよかきしむるを居か 其江
柳あれくひ養れ 戸にけか 長橋
まらまやちりり河らに児二人 南境
向しそよまののまき三月の 淡水
かろくゆひや音集れまろか 如一
きく風の風を杖、まのの妻 落角
叶み風のまきしゆく 鳴 蛙 畚民
かろくやまきくまの荒のもと 介立
はかくて 帰不極の風をし 千町

物と柳かひふのまゆふ家くし 固釋

○
蘇まてまほしきまきり敷か 妻村
葉舟に一葉くゆふま葉か 雀叟
それまにうまやまのつら 眠山

○
あまふ波のまきやまきまき 琴士

○
かろく家やくれまらぬれま 雨松

世

蘇瓦よま、柳や面れ鳴きしり 池曲
柳もや言れつらしきかきしこ 苑生
去風の吹や伊のつゝ山れ色 把友
つゝきさかすしりしりしり 左皇

○ 寺家

面より言とて 二日三日 柳 筆村

○ 玉柜

里れ子の病きしり 枕のふ 井里

○ 口り市江中

黄きれ時中になふ山家うか 一吟
落れ暮はつと嘆けり伊吹しり 杜海

○ 志摩津城守

先明て柳りよのそ 夕口く 麓翁
つらとつとつとつとつと 不れかく 志山
去る柳やふ言りよかしく 恐天
所頼しぬく不れたつらんか 日養磨

○ 近江土山抄

二三ぬと言き 満る 望山 凡言

帰路や 登り下り子一 梅の花 虚白

○ 万木沙市

るや下りて 吾れをたし 菊分 桃史

吾れをたし 人れ 鹿や 雪れ 市一 巴松

梅の月が 月い くらき 下へ 小 李剛

吾れに 携り せ 川 系 中へ 冬 不仁

れと くらき やい せ 落 下り 人 竹 真栖

吾れ くらき け 飄 くらき 吾れ 吾れ くらき 流 柳

二 日 纏 け 号 小 くらき 小 巻 くらき 文 麻

梅れ 吾れ くらき や 梅れ くらき くらき くらき 鳥 来

くらき くらき や 不 くらき 吾れ 物 くらき くらき 雪

くらき くらき くらき の 梅 くらき くらき くらき くらき 梅 地

○ 左津沙市

朔 日 くらき 吾れ くらき くらき 神 くらき くらき 蕙 布

雛 の 日 くらき くらき くらき くらき くらき くらき 米 友

くらき くらき くらき くらき くらき くらき くらき くらき 一 項

くらき くらき くらき くらき くらき くらき くらき くらき 桃 子

くらき くらき くらき くらき くらき くらき くらき くらき 止 水

湯之れ戸よしてなき根をる竹山 古推

麻まぐや葉の心より生れ仲 鍾六

りれろりや珠と珠のいせの煙 九畹

骨とて流るる多や 友梅 栄住

生れ中なき市にありてさかろり 宗林

おろくとすや梅の書約りて字 富山

○

花洛如布

子れのち一松入る急てしより多る 鳥頂

予れ曳て出高田木よの日 蒼乳

宗たれ家え中一たり交さるる 成孝

とくれ志はにさてなまかろり 十丈

かろろふや瓦上まむと縁一は 仙舟

まれ風中と道宗や信ふむおし 世南

きあのこころささるるや叶の一年 権全

明るれ梅嶺やてて 人れま 夙也

○

三月や空のりりて 澄さるる 一山

古

去れりと律呂にうたれ柳か 空所
りまやきさしまれの穂 下方

○

丹波

松ふとの古口ハそく柳か 望物
も柳や碓氷丹波くもふささ 武後

○

信濃守

田れさやかまらのくもさん忍ら 春表
多う市にかくれまつと夕櫓 月夜
黄もや秋ハゆとまきさ 校のき 井扇

山くもれ切れささし 柳のふ 浪一
松乃江を満りりうえれまか 在鳥
山城の古漢古 柳りけのくし 迦杖
学れま友田過し くらりうた 小彫

○

播磨

美有れなくや柳我れ月やうり 以丈
早柳また酔ひやうふまのりかか 伊中

○

丹波

紫く新れとま 柳のまの 酔生

註

年々に下あを流心むえり於 遊山
去風や寝きたる不橋の沙 橋原
不もや扇にわらわ守として 木言
不あ二日又そそく 露くはれ若し 一秀

○ 伊豫

こい越てえまは月あり喜れ水 白鳥
わさくくたれやふれそそく 晴雲
招きあ花あそそそそそ 坊文

○ 豊後

小雲や糸にすくぬきよす 葵子

○ 安藝

ゆきや船はけそは我守 鳥光
○ 尾張柳扇中

いふ不あをとどくつるより梅のふ羽蝶
伊のふすあれきさし 柳 月 鳥川
柱の根にきれては赤ささくふ 山光
もも山にきてはあそそそそ 月致
稚名城人よそそそそ 柳の花 左流

字氣之よのや焼甲れおまう字

以費

○

鳴也ーハよのにまうわがまうわ

直彦

日れそや程々もあふや梅の花

芝石

網干々々門々々柳々々

和潮

号れなくよえゆるよ門むうい

竹芝

あうまかふハアーホまきまき

秋成

押あそにつましくんまのハ藤小

丈竹

○

花評

あふれりのるる系しさうふ

三友

そや松うう下あれ水のハ柳

系院

系六とに梅折子木れまきい

系有

○

三行

六うりそとせねと能走や糸の者

阜池

結部金に六まのれゆる解き分

林学

○

吉田新中

草まうー柱あにみゆま

古董

しきにのをもてあう産家子

遠西

眼のゆね木下かたけり山さくら^{サキ}葉眉
かゝるをそむいしらるゝむれ山六毫
腰り帯て淡平名茶や梅のむち中
むらり象に一本れふし梨のぬき
万葉に起るれさいそり十の節三岳
高りやかすくすりしりて寺れ馬糸ち

○ 芝野社年一

らてくくゝ庭にほりさ木の清い 塞馬
るしけら足ふつやゝゝ落の基 葉は

一里れゆりり茶山のつくとけり 真文
一面にのむく去葉れあるかま子 欽哉
高りや節茶と起すま下しひ子 紫克
嬉しさに音何とてうめれふ 魚雪
りおもくれん 柳や梅の花 北泉
はよ月にまゝむゆいやくれを 徹斎
○ 相模江の島
ちみれれ唐津の地りくまきり 松羅

○ 武藏梅川帯一

説

侍をくつてはさるるやうなれふ 赤龍
吉柳や繪子にさすか岸の家 健女
望と河の古木根明るさくし 由之
健や春のあけいとさきて 未系 一鳴
梅、香を飽よそく 巧いふと 志明

○ 小幡少中

菱川のさくしにうきさ 山路ふ 栗支
秋父根さ明くきこゆふ 著水 多村
くく條や法むふふをれやゆり 小布

○ 鴻巣

至るくはさるしこふさぬ 梅、香 和云

○ 小川

をさるしとれ 短し 梅、香 親家

○ 唐子

親の親れ拙くる 松れ子の口 有基

○ 下野守 松平 忠房

おししるあや梅よかきる 事多し 原ら
梅、香 也 恒根のひらきおらるわ 曲賦

○ 柳れ歌り梅はなかりけき 竹雨
かきゆふにさつふふまの木の葉か 天塊
能子鳴やみおし龍波しとれき 富生
其多や門田に暮しおの月 三々
き山れをうごかうかきけいふ 曉鳥
存ふり海ふむ海やまれあ 極音
溪風よ下れて咲たり梅のさか 梅二
今もあふ知りなれはけ柳のさ 楓橋
秋少りれふさしおきて柳か 伯葉

○ 三村

七種を讀うてさうやまゝに 松南

○ 出羽

かきうふの中に火をとろろ水けき 権次
鈴れをうごかうまのれ柳か 五竹
るれ白のまき、雪中れをうごかう 潮玉

○ 越後新豊田市

茶とんこふふさしり梅のむすこ
旅衣あふ秋の條とあかりたる 侯如

○ 五字の詩

花くにまればさうくやまれば音 玉兔
子六日荒し戸のたゞさ 菴うか 玉柳

○ 東御坊

あゝ海と恵方しけし小家か 孤山
えりや号了に池のさうさ 一菴
我菴は黄子れ下しかう川か 南井
若州やまうく 舟ふ湖の音 寺橋
一通りまきてつかまれば 柳乃まか 一翁

河津の香小を丁あはれ 萩の面 竹丸
竹のあゝまればさうりや江の音 文直
乙子やれ 庵のまればさうさ 徳隆
紅梅や心ゆくと 夢やがしうれ 久藏
炉よゝれて心さうさ 門れ 棧か 茶房
折飛れゆきにならればさうか 渡物
ふんくときさうか 膝れ 州音か 玉光
黄もやかの 崎音りさうり 号笠
海棠れ音のさうさ 也 越了 丁か 右節

喜れくつゆめくれんかろん 羨南
もや二輝をちかひてくく 下れ 吾雅
十リり梅上りてくくや 尊の玉女 萱雨

文政甲申の初春 南風吟社



一
一
一
一
一